サッシャ・ギトリの映画論

安部孝典（関西学院大学）

フランスを代表する劇作家であるサッシャ・ギトリ(Sacha Guitry, 1885-1957)は、36 本の映画を監督した映画作家でもある。しかし、日本はもとより、本国フランスにおいても映画作家としてのギトリの評価は未だ定まっていないように思われる。フランスやヨーロッパ諸国では 90 年代に入ってやっと研究されるようになってはきたが、日本での研究はほぼ皆無である。

サッシャ・ギトリの監督した映画は大別して二つにわけられる。ひとつは、彼自身がルイ 14 世に扮した『シャンゼリゼをさかのぼろう』*Remontons les Champs-Elysées* (1938)やナポレオンに扮した『デジレ・クラリの突飛な運命』*Le Destin fabuleux de Désirée Clary* (1941)、宰相タレーランに扮した『ナポレオン』*Napoléon* (1955)などの歴史劇である。もうひとつは、『新しい遺言』*Le Nouveau Testament* (1936)や『私の父は正しかった』*Mon père avait raison* (1936)、『カドリーユ』*Quadrille* (1937)などの自身の戯曲を映画化した現代劇である。しかし、現代劇の方は当時、「撮影された演劇＝テアトル・フィルメ(le théâtre filmé)」と呼ばれ、舞台をそのまま写し撮っただけのまったく映画的ではない作品と揶揄されることが多くあった。

歴史劇にしろ、自身の戯曲からの現代劇にしろ、ギトリの映画はフィクションでありながらも何かを記録する手段としての映像であると言える。例えば、歴史劇である『シャンゼリゼをさかのぼろう』では、パリの顔とも言えるシャンゼリゼ通りを、コンコルド広場からエトワール広場までさかのぼりながら、1617 年から 1938 年までの間のその大通りにまつわる歴史と創作を、文字通り現代からさかのぼって描いている。また、現代劇である『新しい遺言』という作品は、1934 年のギトリ自身の同名戯曲からの映画化であり、舞台上で起こるフィクションをそのままフィルムに移しかえて記録しただけの作品である。それが、彼の他の戯曲の映画化作品と同様に、「テアトル・フィルメ」と非難される所以なのだが、とにかく、彼は戯曲として完成されている物語にさらに手を加えることはせず、そのまま映画として撮影し残そうとした。つまり、ギトリの映画はフィクションを物語っていながらも、その内容と形式においてきわめてドキュメンタリー的であると言える。

以上のことから、本発表は、サッシャ・ギトリの映画を取り上げながらフィクションとドキュメンタリーの関係性に関する一考察を加えることを目的としたい。舞台と映画、音声と映像の関係などにも言及して考察をすすめたい。